

ウルフスタンの説教と その時代背景

— 『イギリス人へのルパスの説教』を中心にして —

宮 崎 忠 克

序

『イギリス人へのルパスの説教¹⁾』を書いたウルフスタン(Wulfstan)はロンドン司教(996-1002年²⁾)を経て、その後ウスター司教(1002-16)、1008年からはヨーク大司教を兼務し1023年に没しているが、優れた説教を書いたばかりでなく、1008年以後国王エセルレッド2世とクヌートによって発布された法律の起草者でもあった³⁾。ところで、上記の副題の説教はラテン語で *Sermo Lupi ad Anglos* と称され、1014年が著作年代とされている⁴⁾。

Wulfstanの第一要素ウルフは「狼」の意味で、ラテン語ではこれをルパス(*lupus*)という。*Lupi*はこのラテン語の属格形であるから、いわばルパスは彼のペン・ネームと言えるだろう。彼は多くの説教を書き、中でも上記の説教は最も有名で、ヨーク大司教の在任中に書かれた。その書き出しは「我が親愛なる同胞よ、真実を知ってもらいたい。この世はその終末への道を急速に辿り、世の終わりは近いのだ」で始まり、終末論的かなり激しい言葉が続く。彼は世の墮落と非道の横行を嘆き、神の掟のみならず、国法もなおざりにされていることを厳しく糾弾する。時代背景は11世紀の初頭を迎えたエセルレッド2世のイングランドである。

この小論ではウルフスタンの上記の説教を中心に取り上げて、当時の時代背景を年代記、法律、詩作品に基いて論じる。またウルフスタンはなぜこのように激しい説教を書くに至ったのか。さらに彼の説教を同時代のアルフリッチ司教の説教⁵⁾と比較して考えてみたい。なお、ウルフスタンには『行政組織の提要⁶⁾』という文書が残されているが、この作には彼の説教を思わせる言葉が連ねられ、社会の各階層に属する人々の果たすべき役割がかくあるべしと示されているので、この内容についても適宜言及する。

1.

『イギリス人へのルパスの説教』では国民を襲う数々の不運の諸相が次のように語られている。

今や、長きにわたり、国の内外では何も栄えることなく、ほぼ全ての地方で事しげく起きたのは、侵略軍（ヴァイキングの襲来）、飢饉、火事、流血だった。さらに、窃盗、殺人、暴力、疫病、家畜の伝染病、病気、嫉妬、怨恨、盗賊の略奪はことのほか激しく我々を痛めつけた。我々は途方もない税金に苦しみ、嵐によって収穫を無にしたこともしばしばあった。⁷⁾

ウルフスタンがこの説教を書いた当時の時代背景、とくに10世紀末から11世紀初頭にかけてのイングランドの状況は、『年代記』の記述からも十分に裏付けられる。すなはち、デイン人は998年にはワイト島に滞留し、糧食をハンブシャとサセックスから調達し、翌年テムズ川に入り、ロチェスターに侵攻した。その後ケントの西部はことごとく破壊、略奪されたと記されている。1001年には主としてイングランド南部で激戦が繰り返され、

ハンブシャでの戦ではアゼルウエアルドの上級代官⁸⁾を含め、名のある人々が81名、戦死したと記録されている。この年の最後の記載ではヴァイキングがワイト島に到達し、その後和睦が成立したと記されている。このように毎年、戦闘が繰り返され1011年の記録では、ヴァイキングが蹂躪した地域が列挙されている。

- (1)東アングリア、(2)エセックス、(3)ミドルエセックス、(4)オックスフォードシャ、(5)ケンブリッジシャ、(6)ハートフォードシャ、(7)バッキンガムシャ、(8)ベッドフォードシャ、(9)ハンチングドンシャの半分、(10)ノーサザンプトンシャの大半、(11)テムズ川南部のケント州全体、(12)サセックス、(13)ヘイスティング地方、(14)サリー、(15)バークシャ、(16)ハンブシャ、ウルトシャの大半。⁹⁾

以上のように北部と南西部を除いたイングランド中心部はほとんどヴァイキングに蹂躪されたことになる。

『年代記』のなかでこのような災いが生じたのは、悪政によると記され¹⁰⁾、この理由はヴァイキングに対して提供される貢ぎ物が間に合わなかったり、彼らに対抗する戦が行われなかったことが原因とされている。この批判は興味深い。『年代記』のなかで政治に対する批判が公然と記録されるのは、それだけ時代が混乱し、疲弊していたことを実証している。長年にわたる戦で国民の負担は限りなく増大し、民衆の貧困は想像に余りあるが、1007年の記録では3万6千ポンドの金が、貢ぎ物としてヴァイキングに支払われている。翌年、国王はイングランド全土に造船の命令を下し、さらにヘルメットと胴よろいの製作を命じた。一般民衆にとってこれらの仕事は課税以上に苛酷な負担になったと思われる。翌年には船が完成し、ヴァイキングの侵略から国を防衛すべく、船団はサンドウィッチに集結し

た。だが、年代記作者はこれらの船がどれほど有効な役割を果たしたかについては疑問を呈している。

このような状況下で略奪、放火、殺人が行われたのは、ヴァイキングの所業のみに起因するとは言えないだろう。少し年代を遡るが、986年には「家畜の伝染病がイングランドで初めて起きた」と記されている。その後家畜の疫病は繰り返されたと推測される。1005年にはイングランド全体に大飢饉が起きたことが記され、「これほど苛酷な飢饉はだれの記憶にもなかった」と年代記作者は語っている。『年代記』の、991年の記録にはオラーフ率いる93艘の船団がフォークストーンに到来し、その周辺を略奪し、イブスウィッチからモルドンに回航し、この地で州長（アルダーマン）のビュルフトノースが討ち死したことが記録されている。『年代記C』には1万ポンドがヴァイキングに支払われ、この支払いは「ヴァイキングが沿岸沿いに大きな恐怖を引き起こしたから」と記され、おそらく侵略軍は略奪、放火などの手段を講じて金の支払いを強要したのであろう。

通称『モルドンの戦い』と呼ばれているが、オラーフ指揮下のヴァイキング軍との戦いの模様を描いた1編の短い詩が残されている。¹¹⁾この詩は歴史的事件に基づいて書かれ、固有名詞が表現されているので興味深い、それ以上にこの苦難の時代の武将の生きざまを生き生きと伝えているので、史実の一局面として紹介しておこう。和平と引き換えに賠償金を求めるヴァイキング側の伝令に対して、イギリス軍の指揮官ビュルフトノースは次のように応じる。

海賊よ、わが国民のことばが聞こえるか。

お前たちに贈られる貢ぎ物は長槍、いにしへの剣の刃、
毒塗りたる槍の切っ先のお返しだ。お前たちの武器は
戦では役に立つまい。海賊の伝令よ、次の返事を伝えよ、

お前の国民にさらに恐ろしい次の知らせを伝えよ。
わが主(あじ), エセルレッドの国と沿岸,
国土と国民を守る国王の軍勢のもとには
恥すべきいかなる州長もいないと。
異教徒は合戦(かせ)による衝突で討ち死せねばならぬ。
お前たちは我が国土をこれほどまでに侵略したが,
一戦も交えずに我々の貢ぎ物を船へと持ち帰えさせるのは
屈辱的と思われる。
いともやすやすと我が宝物を運ばせず,
貢ぎ物が与えられる前にまず, 剣の刃と槍の切っ先が,
戦の恐ろしい勝負を決すべきなり。¹²⁾

この詩では国王エセルレッドの為に州長は一命を賭すことが語られているが、ウルフスタンはその説教では直接ビュルフトノースの英雄的行為についてはなんら言及はしない。だが、彼の説教の言辞は現実の裏付けに基づき、極めて説得力に富んでいと理解できる。ウルフスタンは彼の求めている理想的人間像をこのビュルフトノースに見たと言えるだろう。以下は彼が奮闘の甲斐なくキリスト教徒として最後を迎える場面である。

人々の神よ、私がこの世で享受した喜びのすべてを
あなたに感謝する。慈悲深い神よ。今、私がぜひ必要とするのは
あなたが私の魂に恵を授けてくださることです。
それは、私の魂があなたの御力のなかに旅立ち、
心安らかに赴くためなのです。
おお、天使らの主よ。私はあなたに嘆願したい、
地獄の悪魔らが私を滅ぼすことのないようにと。¹³⁾

このような描写はかなりパタン化されてはいるが、戦場でヴァイキングたちの犠牲となり、彼と同じ思いに駆られて果てた武将も多に違いない。この作品の後半ではビュルフトノースの家来たちの実名が挙げられ、主人同様の運命が描写されている。イギリス軍のこの敗北は『年代記』の991年の項に史実として記載されているが、それより半世紀以上前の937年には、実際に詩の形式でブルナンブルッハの戦闘場面が描かれている。これは国王アセルスタン率いるイギリス軍の戦勝の記録であり、前者と比較すると、そのコントラストが著しい。このようにデイン・ロウ地域で展開されたヴァイキングとの戦闘の様子が二つの詩で記録されているのだが、これらの詩は後世に貴重な情報を提供していると言えるだろう。モルドンの詩はその記述内容から991年のまもなく後に創作されたと考えられている。¹⁴⁾ また『モルドンの戦い』で描かれたビュルフトノースの家来たちの姿は、主人に対する彼らの忠誠心が打ち砕かれて行く時代を象徴していると考えられる。この戦はエセックスの領主とその家来がヴァイキング軍との対決であるから国家を左右するような一大決戦とはいえない。だがなぜ『年代記』に記録されるような扱いを受けたのか、あるいは詩に書き留められたのか。モルドンでの決戦では逃亡者が出た負け戦であったとは言え、おそらく彼らの奮闘ぶりはこの時代のイギリス人の心を大きく鼓舞したに違いない。この詩の評価についてはいくつか見解が分かれるが、この問題についての詳細は別の機会に譲ることにする。

2.

ヨーク大司教、ウルフスタンはエセルレッドの法律の起草者で、政治家、法律家でもあったから、世の不正に対しては、ことのほか厳しい態度を採ったと思われる。彼の『偽りの神々に関する説教』では、悪魔の教えによっ

て人類が太陽，月，星，ジョブ，マーキュリー，ヴィーナス，ウオーデンなどを崇拜する結果になったと強く戒めているが，なぜ彼はこの時期に，このような題目の説教を行なったのか。上記のように，当時のイギリスはまさしく異教徒に成り下がった者たちの社会で，彼らの所業が目にも余るほどだったからに違いない。民衆の間にはキリスト教への不信が芽生えても不思議ではない現実が存在し，したがって異教崇拜への回帰が顕在化していたために，ウルフスタンはこの点を強く戒める必要性を感じていたと思われる。特にエセルレッドの法律顧問という役職から判断しても，彼の口調の激しさが納得できる。彼は実際に起きている事件を取上げさらに次のように言葉を続ける。

この世できわめて大きな反逆は，主〔国王〕の魂を欺き，死に至らしめ，あるいは彼を殺害せずに国外追放にすることである。このいずれもがこの国では現に行われているのだ。エドワード（国王）は裏切りに会い，のちに殺害され，さらに彼の遺体は焼却¹⁶⁾された。

エドワードとはエドガー王の王子の一人で，継承問題のこじれから，即位後まもなく殺害された殉教王エドワード（c.962-78）を指している。遺体が焼却されたこと自体，極めて異例のことだったに違いない。エドワードの死後30年以上経過したとは言え，この事件がいぜんとして人々に生々しい記憶を残していたと思われる。

ウルフスタンは国内の人心の荒廃，さらにはまたヴァイキングによって加えられる恥辱，屈辱についても触れ，「ああ！イギリス人が現に受けている悲惨と大きな恥辱は，全て神の怒りからいずるものなのだ」と，国民の信仰心の放棄を慨嘆するのである。いや，一般庶民のみならず，彼は宗

教家に対して、ことのほか鋭い批判を加えている。この説教を読むと、この時代の荒んだ有り様が鮮烈に抉り出されている。さらに引用を続ける。

あまりにも数多くの人々が貧窮に陥れられ、ひどい屈辱を受けている現状である。貧者たちはひどい裏切りに会い、残酷にも罠に陥れられ、まったく潔白であるにもかかわらず、彼らは異邦人の手中へと国中の至るところから広く売られて行くのだ。子供らはささいな罪がもとで、残酷非道にも国中の津々浦々で奴隷にされているのだ。¹⁷⁾

人身売買が広く行われていたことは以下の記述によってさらに明確となる。

所によっては父が息子がある値段で売り払い、息子が母を、兄弟が他の兄弟を異邦人の持ち物として売り払うという犯罪が起きたのだ。何人であれ心あるものはかかることがすべて、類くない恥ずべきことだということを熟慮してもらいたい。¹⁸⁾

次の一文の内容は現実には起こり得たがどうか分からぬが、時代の混乱状態を描いていると言えるだろう。

奴隷が主人のもとから逃亡し、キリスト教徒からたまたまヴァイキングの一員となり、その後また奴隷がぐうぜん戦場でその主人と会いまみえることになったとして、仮に奴隷が昔の主人の息の根をかんぜんに止めることになれば、その主人は己の親族のすべてに対し、人命補償金の支払いを受けずに死ぬことになるだろう。もしその主人がかって所有したその奴隷の息をかんぜんにはじめ

てしまえば、彼は貴族並の人命補償金を支払わねばならぬであろ
う。¹⁹⁾

彼の数多くの説教のなかで、これ以上に激烈な言葉で時代の風潮を咎める
警世の説教はない。

この激しい口調は同じ時代のアルフリッチの説教の文体と比較すると顕
著な対象を示している。

この悪人たち（ギリシャの神々、サツルネ、ジュピター）は最も
名高き異教の神々だったが、異教徒たちは彼らに敬意を払い、か
れらを神とした。にもかかわらず、その息子（ジュピター）はか
れらの邪悪な崇拜を受けていた父（サツルネ）以上に尊敬された。
このジュピターは異教徒たちが誤って信じていたあらゆる神のな
かで最も崇められている。彼はいくつかの国民のなかではトール
神と呼ばれ、デイン人たちは彼をこのうえなく愛するのである。²⁰⁾

アルフリッチの文体の詳細な分析は他に譲るとして、『聖者伝』や説教集
の文体の特徴は頭韻を意識的に配置することを心掛けている点にある。もっ
とも完璧な頭韻詩を意図したわけではないが、部分的には詩的な構成法が
認められる。ウルフスタンにも説教によっては頭韻を効果的に使用してい
る箇所もあるが、前者に比較すれば頭韻の使用は限られている。²¹⁾アルフリッ
チの語る内容はウルフスタンのような激烈な調子はない。両者はともにイ
ギリスの激動期に生きた人物だが、語り口とその内容もきわめて対照的と
言わざるを得ない。アルフリッチの『過ぎ越しの祝日におけるいけにえに
ついての説教』の末尾から一節を引用しておく。²²⁾

ヘブライの言葉でこの季節は *Pascha* と呼ばれる、すなはちラテン語では *Transitus*、英語では *Passover* (OE *færeld*) 「過ぎ越しの祭り」である。なぜならばこの日、神の人々はエジプトの地から紅海を渡り、奴隷の身を脱し約束の地へと入ったからである。我が主もまたこの時、洗礼者ヨハネが言ったように、現世から天の父のもとに赴かれた。我々は我々の水源を求め、悪魔からキリストへ、変転するこの世から神の不変の王国へ赴くべきである。だが、いやしくも我々がこのつかのまの生から永遠の生に、我々の蘇りのあと救い主キリストのもとへ赴こうと願うならば、まず我々は現在の暮らしのなかでは罪から聖なる徳へ、悪習から善行へと赴くべきである。生ある父は我々の罪のためにキリストの命を召したもうたのだが、その父のみもとへ救い主キリストが我々をお導きくだされることを。その寛容なお気持ちにたいし、救い主に栄光と、称賛と、終わらなき世界があらんことを。

アーメン

復活祭の説教の内容としてはきわめて常識的といえる内容であり、激しい調子の形容詞の用法も見られない。「罪から聖なる徳へ、悪習から善行へ」という言葉のなかに、ウルフスタンと同じ時代に生きる人々の歩むべき指針が簡潔に示されている。

ステントンは「ウルフスタンとアルフリッチとの違いは後者は公的な政治に関与することはなかった」と述べ、さらに「ウルフスタンにはアルフリッチの学殖も文学的センスもなかった」と語っている²³⁾。だが、これは誤解を招きやすい。ホワイトロックの指摘によれば彼の古典についての知識は²⁴⁾はけて生半可ではなかった。

ホワイトロックによるとウルフスタンの説教 V11 はアルフリッチの

De Septiform spiritu の修正版で、ウルフスタンの『偽りの神について』というタイトルの説教 XVIII はアルフリッチにも見られ、明らかにこの説教は後者の *De falsis deis* の修正版であると言われる。さらにウルフスタンの説教 LIV は後者の『聖堂奉献に向けて』 (*In dedicatione ecclesiae*) に基づくと指摘されている。²⁵⁾ このように、ウルフスタンはアルフリッチからの大きな影響を受けていたことは否定できない。

ウルフスタンの『行政組織の提要』²⁶⁾ のなかで扱われている主題は、現世の国王、国王の顧問、司教、貴族、国王の代官、司祭、修道院長、修道僧、女性司祭、尼僧、平信徒、未亡人、教会、全てのキリスト教徒に及んでいる。以下その内容の一部を紹介する。

国王に関するウルフスタンの基本的見解では、王はキリスト教を高揚し、熱心に神の教会を擁護し、正義の法によって全キリスト教徒に平和と和解をもたらさねばならない。彼によると「賢明な王はキリスト教と王の身分を賞揚し、それを高め、常に異教を弾圧し、糾弾しなければならない」と説く。法によって認められた王を堅固に支える柱は 8 本あり、それは「真実」、「忍耐」、「寛大」、「良き忠告」、「悪の懲罰」、「善の喜び」、「節度」、「正義」であり、この 8 項目が王の資質として不可欠と考えられた。さらに王座を支えるのは祈願者、労働者、兵士の 3 本の柱で、どの一本が弱体化しても、王はその座から転落するだろうと記されている。このような国王の位置付けは、当然キリスト教の影響によるものであろう。大陸時代の王の性格は『ゲルマーニア』でおぼろげながら伺い知ることができるが、この書の 12 章によると、王のわずかに有する特権は司法においては、軽犯罪者が支払う弁償の一部を受領するに過ぎない。²⁷⁾ このゲルマンの王の地位とウルフスタンの説く国王のそれとを比較すると、その大きな違いに驚く。これは部族中心の社会からキリスト教を支えとした王権確立の封建社会への推移を示していると言えるであろう。『年代記』のなかでイングランド

の各王家の血統が示されているが、これは後の時代になって王家の威厳を増すために創作されたかも知れぬ。だが、アングロ・サクソン社会では国王の世襲制の伝統が強化されたことは明らかであり、やがて法律が整備された結果、国王の性格がたんなる軍事の指導者、指揮官ではなく、政治ならびに教会を支配する権力者へと次第に変貌したと考えられる。

『ゲルマーニア』には「大きな問題については全員 (*omnes*) が合議する」という記述が見られ、民会の存在を予想させるが、²⁸⁾アングロ・サクソン時代には王の顧問による合議制の「賢人会」が組織されていた。²⁹⁾ウルフスタンの記述には、国王の顧問に関する言及があり、王の次に位するのは「司教」、「貴族」、「將軍」、「代官」、「判事」、「学者」、「法律家」で、彼らは神の前で「正義」を守ることが必要と記されている。アングロ・サクソン人の移住初期の時代を別にして、キリスト教が普及してからは上記のような人達が、国王の側近として重要な働きをしていた。イギリス民主制の起源を遠く辿るならば、今日的意味での民主主義とは程遠いものにしても、この賢人会にその萌芽を見ることが出来ると言えるだろう。ウルフスタンは「代官」について以下のように記している。彼は「キリスト教徒の羊飼いであるべき者たちが強盗とは惨めなことだ」と慨嘆する。「代官」を指して述べている言葉なので驚かされるが、彼はさらに加えて「彼らはありとあらゆる点で不正な法律を編み出し、貧しい者たちを不当に扱うのである」と言う。³⁰⁾これはいつの時代でも繰り返される悪習である。

「司祭」にたいする警告として、ウルフスタンはまた次のように語っている。

悪を求め悪に従うことをやめない者は、永遠の苦悩を耐えねばならない、つまり魂と肉体はともに地獄に赴かねばならず、地獄の責め苦のなかで悪魔と住まねばならぬ。³¹⁾

彼は司祭にたいして、最も厳しい意見を吐露している。この時代（11世紀初頭）の国家組織の乱れを糾弾する彼の姿勢は、見事な文明批判を展開していると言えるのである。さらに聖職者一般についても彼は過激な見解を示している。まず調子を抑えて「あらゆる貞節が聖職者には相応しい。なぜならば、かれらは他のあらゆる人々に、すべての不貞節を禁じなければならぬからである」と始め、続けて「すべてのキリスト教徒に正義を説きさらに範を示すべき者たちのなかに、恩恵よりもむしろ永遠の破滅の手本を示すものがあるのはきわめて恐ろしいことである……今日、姦淫を犯し、かつ犯した者があまりにも多すぎるのである……私は神を愛するために彼ら聖職に位する者たちが、これをやめるように願い、さらに厳しく命じる次第である³²⁾」。さらに続けて「教会が司祭の伴侶であり、正しくは彼には他のいかなる伴侶も存在しないのだ。だから、妻もこの世のいかなる幸せも、司祭には相応しくはないのである」と断じている。同大司教は返す刀で修道僧も切り捨てる。

聖職者たちは快樂と安樂を求めて一切のことを為し、大食と空しい喜びを好み、うろつき回り、放浪して日がな一日、馬鹿なまねをし、おしゃべりに興じて戯れ、役立つことは何ひとつ行うこともないのだ。³³⁾

ウイヒトレッド (Wihtræd) の法律第三条に「違法な結婚をして暮らす者は、罪を悔いて正しい暮らしに立ち返るか、あるいは教会の仲間から排除されねばならぬ³⁴⁾」とあるように正しい婚姻の道を示している。このテーマは、ビード以来ウルフスタンの説教にいたるまで何度も繰り返して取り上げられる重要問題であった。同大司教は異教の復活をことのほか恐れていたが、この激動の時代に、激しい気迫と神の教えを忠実に実践しようと

するウルフスタンに、我々は一人の警世家の姿を見ることができる。彼はイーリに埋葬されたが、生前の様々な活躍にもかかわらず殉教者に叙せられることはなかった。彼の次の一文を引用してこの項目を締めくくりたいと思う。

我々はみな、ひとつの神を愛し、敬い、ひとつのキリスト教信仰を勤勉に守り、全力を尽くして異教の慣行をことごとく打ち捨てなければならぬ。³⁵⁾

3.

まず、ウルフスタンと関わりのあったエドガーと、次にエセルレッドに至るサクソン王朝統治下の国内状態を素描しておく。

959年エアドウイ (Eadwig) の没後、弟のエドガー (Edgar) が王位を継ぎ、ブリテン島全体の支配者と目された。975年6月に没するまで彼は神の掟を守り、民生にも心を傾け、彼の時代は比較的平和な日々が続いたと思われる。エドガーの悪行が一つだけあると記されているが、それは外国の慣習を好み、異教徒の風俗習慣を国内に導入し有害な外国人を招いたことだった。だが、いかなる風俗習慣かは記されていない。年代記作者は「魂の永遠の旅路で彼の魂ををとお守り下さるように、彼の善行が悪行よりは偉大ならんことを」と神に許しを祈願している。この年の記録も頭韻詩で書かれているが、³⁶⁾これはエドガー王の功績が高く評価されていたことを物語るものだろう。王は、「西サクソン人の友であるアングル人の支配者、マーシャ人の保護者」と称せられた。

『ウルフスタンによるエドガーの教会法』³⁷⁾でファウラーはウルフスタンがエドガーの教会法と関わりのあったことを実証しているので、まずこの

作品について簡単に触れておく。コーパス 201 の写本によると、教会法の 18条で祝日に異教の歌と悪魔のゲームが禁じられ、19条では日曜日に商売をすること、さらに集會が禁じられ、20条には恥ずべき髪形が禁じられている。同上の「異教の歌と悪魔のゲーム」、「恥ずべき髪形」とはいかなるものか、残念ながら不明である。伝統的な英雄詩を吟じることが禁じられたのであろうか。あるいは病氣治療の際に歌われたまじない詩が禁じられたのか。「悪魔のゲーム」を表す古英語は、*deofles gamena* である。だが、これだけの情報では実態は不明である。

とくにこの教会法のなかで司祭の果たすべき役割が詳細に記されているが、これはウルフスタンの『行政組織の提要』の内容を思い起こさせる。またアルフリッチの聖者伝の³⁸⁾17章『(うらないに関する) ラテン語の説教』(*Sermo in Laetania [de Auguriis]*, pp.364—383)で、「うらないを信じるものはキリスト教徒にあらずして、神を冒瀆する背教者なり」と記されている。

さらにエドガーの法典には教会と世俗に関する2種類の法典があるが、前者の5条には「毎週日曜日は土曜日の正午から月曜の夜明けまでを祭日とすべし」として定められている。一方、後者からその内容の一部を引用する。³⁹⁾

1条 この種の災難(疫病)は罪を犯し、神の命令を軽蔑した報い、とりわけキリスト教徒が10分の一税として神に収めるべき支払いを怠った報い……

という文言が見られる。

第1条の4に「それゆえ我(国王エドガー)と大司教はあなたがたが神の怒りに触れぬように、あるいはまた現世での突然の死、あるいは神に支払

うべきものを怠って、実際に永遠に続く地獄での未来の死に値しないように命じる」とある。この大司教は、当時カンタベリのダNSTAN大司教を指していることが判明している。⁴⁰⁾

この記述はウルフスタンの説教の口調と類似しているが、彼はこの文書から題材を借りていると指摘されている。⁴¹⁾

この法典の最後の16条は「我は命有る限り諸君たちにとって、いと慈悲深き主（あじ）であり、諸君たちが平和の維持に極めて熱心である為に、我は諸君らすべてにすこぶる満足している」という言葉で終わっている。エドガーの時代はつかの間の平和が訪れた時代であった。

975年、エドガーの子息、エドワードが西サクソン王国を継いだが、978年に殺害された。殺害された年は年代記によっては979年と記されている。弟のエセルレッドがエドワードの後を継いだが、980年代になるとヴァイキングの侵略が再開され、既述のように991年にはオラフが93隻の船とともにフォークストン、サンドウィッチ、イプスイッチを略奪し、モルドンに襲来した。ビュルフトノースが彼を迎え撃って戦死した戦の様子は既に述べた。994年オラフとスウエインがロンドンを襲撃し、さらにイングランド南部のケント、エッセクス、ハンプシャに大きな損害を与えた。エセルレッド王は彼らと和睦し莫大な貢ぎ物をデイン人に支払い、これがさらに高じて悪循環が生まれた。この間の当時の社会状態については、ウルフスタンの説教を取り上げた際にすでに述べてある。このようにエセルレッドの時代は社会的混乱期であり、991年にはエセルレッド王とヴァイキング軍との条約が取り決められている。

エセルレッドの条約の序文は以下のとおりである。⁴²⁾

まず、これらはエセルレッド王とすべての評議員がオラーフ、ジョステイン、ステイタの息子、グスムンドと同行するすべての軍勢

と結んだ和平の合意と条件である。

さらに、6条1項には次の協定がある。

停戦が確立する前に行われたあらゆる殺戮と略奪及びあらゆる傷害に関してはすべて不問とし、だれも仇討ちをしたり、補償金を要求することはできない。

このような取り決めは侵略軍との共存関係を維持するためには不可欠であったろう。

第2条に「河口に入るあらゆる貿易船はたとえその港が停戦外の地域にあっても、船が難破して浜に打ち上げられない限り、(法による)治安を受けられるものとする」と記されているが、これはイギリスの貿易船が外国にまで出かけ、とくにデンマークとの取引があったことを示すものと考えられている。なお、浜に打ち上げられた難破船はその国の王あるいは権利を有する土地所有者の財産と考えられた。⁴³⁾

この条約の最後に「金銀で2万2千ポンドがこの休戦のためにイングランドからヴァイキングが側に支払われた」と記されている。

997年にワンテッジで発布されたエセルレッドの法典⁴⁴⁾があり、この序文には民衆の安寧の改善のために国王エセルレッドと顧問たちが布告した法律と記されている。この法律はかなり詳細にわたる罰則の規定に特徴がある。

1008年にはウルフスタンが起草したエセルレッドの法典⁴⁵⁾があり、4条の1項、5条では社会のそれぞれの階級が神のために生きることが要求されている。これらの階級の役割を具体的に記したのがウルフスタンの『行政組織の提要』である。エセルレッドのこの法典は35条で「ひとりの国王を

忠実に支え、できる限りりっぱにわれわれの命とわれわれの土地をともに守り、神の助けを求めて心の奥底から全能の神に祈ろう」という条文で締めくくられている。

「これらの法には王自身は支配者というよりも説教家として語る章句が多い」と論評されているが、これはすでに言及したようにウルフスタンが起草にあたって貢献していることを物語っている。⁴⁶⁾

1013年から14年にかけて、一時的ではあるが侵略したデンマーク王スエインがイングランド王を兼任した。1014年、スエインの死後、侵略軍の艦隊は彼の子息、クヌートを王に選んだと記されているが(『年代記』)、エセルレッド王が没したのは1016年4月23日とされ、彼の後継者はその子エドモンドだが、治世は1年に満たないものだった。一時は国外に逃れたエセルレッドが人気のない国王だったことはそのニックネーム the Unready「無策王」から推察される。この王の強い引き立てによってウルフスタンは王の顧問となり、既述のようにまずロンドン司教、ウスター司教、ついでヨーク大司教を務めた。W. K. ローソンによると、ウルフスタンは国王あるいは顧問たちに適当な贈答品を送って情実にすがったと述べているが、その経緯については判然としない。エセルレッドに付けられる「無策王」⁴⁷⁾というあざ名は、彼の対ヴァイキングの方針の優柔不断を揶揄する表現だが、実際にはエセルレッドの -red「忠告」と the Unready との懸詞で、この形容辞はエセルレッドの死後かなり後になってから付けられた。1016年デンマーク王クヌートがイングランド王となり、35年までの約20年間デンマーク王の支配が続いた。

結び

エセルレッド2世の生きた時代はまさしく激動の時代だった。この時代はエドガーの比較的安定した時代に比べて、ヴァイキングの侵略の再開によって国内は疲弊化し、信仰が廃れて人心は乱れ、世紀末とあいまって終末論が台頭し始めていた。このような時代背景の下でウルフスタンとアルフリッチという2人の説教家が輩出し、2人はそれぞれ個性の違いはあるが散文を通して宗教文学の誕生に大きな貢献を果たした。いわば時代の必要性が2人の説教家を生み出したとも考えられるのである。ウルフスタンはアルフリッチからの影響を受けたことが指摘されているが、アルフリッチの説教はおおむねオーガスチン、グレゴリー、ビードに由来していると指摘されている。⁴⁸⁾

モルドンで戦死したビュルフトノースは家臣の裏切りにあうが、自らはゲルマン武士の本領を發揮した生き方にしたがって一命を落とす。古英詩『モルドンの戦い』では時代が変動する過程で人間の2つの生き方が対比されているが、我々はウルフスタンの思想の一端が行動によって実践される姿をビュルフトノースに見ることができる。

この世紀末に先行する10世紀後半、エドガーとダンスタン司教はベネディクト派の修道院改革運動の先頭に立っていた。この活動が既に見たように教会法(Canon)に反映されていると考えられる。教会あるいは修道院の退廃、墮落はすでにビードの時代から指摘され、⁴⁹⁾さらにはボニフェス、アルクィンとイギリスの歴代の教会人も不正を正す姿勢を示して来た。時代が進むに連れ、腐敗と墮落は深刻化し、ウルフスタンは司祭など教会内部の人間のみならず、役人、とくに代官を糾弾する。すでに見てきたように彼の言葉には激しい調子が込められ、教会法には教会人の果たすべき役割が列挙されているが、ウルフスタン大司教がこの起草に大きな貢献を果た

していたことが指摘されている。この理由は『イギリス人へのルパスの説教』を初めとしてウルフスタンの他の説教で見られる語法の特徴が、このエドガーの教会法にも明らかに認められるからである。

M. K. ローソンは歴史的観点からエセルレッド2世の顧問たちがなぜ1014年にエセルレッドをイングランドへ復帰することを認めたかと疑問を提起している。すなはち、アングロ・サクソン年代記では「彼らは彼（エセルレッド）が以前よりも正しく彼らを治めるつもりであれば、実の主ほど彼らにとって親しい主はないと言った」（『年代記C』）と書かれているが、ローソンはこれに疑問を提起しているのである。年代記作者にとって、エセルレッドがノルマンディに脱出する以前の彼の国内統治は、公正を欠くと見なされる面があったことになる。アルフリッチとウルフスタンの2人の説教家のエセルレッドに対する不満は、程度の差はあるが両者の作品に見られる。

混沌の時代がエセルレッド無策王を生み、エセルレッドのために時代の英雄としてビュルフトノースが生まれ、時代を糾弾するウルフスタンと冷静に神の道を説くアルフリッチが輩出した。一方、教会を中心とした写本製作は着実に進歩し、司教が儀式で使う祈祷書、聖者の祭日を記した教会暦、詩編、教父の著作の必要性によってイギリスの書法の発達が刺激されたと言われるが、この成果は文化的に見て暗い時代の明るい一面と言うべきであろう。⁵⁰⁾ウルフスタンとアルフリッチは、散文の発達だけにとどまらず、広くイギリス人の考え方に大きく寄与し、両者はいずれも時代によって生かされた人物と言えるであろう。エセルレッドの後継者はエドモンドであったが、半年足らずでクヌートの時代を迎え、時代はハルザ・クヌート、エドワード懺悔王、ハラルドを経て、1066年のノルマンの征服に至るアングロ・サクソン王朝の終焉へと近づくことになる。

注

(初出の人名, 論文題目, 作品名は原語名を記し, 以後, 日本語で統一する。ただし論文, 雑誌, 著書名は簡略して表記した。『年代記』は断りのない限りEテキストを表す。)

1. Dorothy Whitelock, *Sermo Lupi ad Anglos* (University of Exeter, 1976). (以後, 『ルパスの説教』, 引用箇所は同テキストの行数で示す。)
2. *The Concise Oxford Dictionary of The Christian Church* ed. E. A. Livingstone (Oxford Univ. Press, 1977), p. 561 Wulfstan.
3. Cf. Roger Fowler, *Wulfstan's Canons of Edgar* (EETS: Oxford University Press, 1972) (以後, 『エドガーの教会法』).
ホワイトロック, 'Wulfstan and the so-called Laws of Edward and Guthrum,' *English Historical Review*, 1941, 1—21; 'Wulfstan and the Laws of Cnut,' *English Historical Review*, 1948, 433—52. (以後, 『英国歴史評論』).
4. ホワイトロック, 『ルパスの説教』, 6頁。
5. *Homilies of Ælfric* Vol. I, II ed. John C. Pope (EETS, 1968), *Ælfric's Catholic Homilies*. Vol I, II ed. Malcolm Godden (EETS, 1979).
6. Wulfstan, 'The Institute of Polity, civil and ecclesiastical.' (以後, 『行政組織の提要』), *Ancient Laws and Institutions of England*, ed. B. Thorpe, (London 1840) II, 304—40, (以後, 『古代の法』).
7. 引用文はホワイトロック, 『ルパスの説教』55—60行から。この内容の多くは年代記によって裏付けられる。例えば, Dテキストでは975年の飢饉は「極めて大きな飢饉」(*swyðe mycel hungor*), 1005年(D)の飢饉は「大飢饉」(*se micla hunger*)と呼ばれてはいるが「これほど激しい飢饉は人の記憶になかった」と記されている。なお, 同テキストでは家畜の伝染病の発生が986年に初めて起きたと記されている。

8. high-reeve について *OED* はこの役職の正確な性質は不明としている。
9. この年の年代記の説明によると、国王と彼の評議員たちはヴァイキングにたいし和平を求め、略奪の停止と引き換えに貢ぎ物と糧食の提供を約束している。
10. 1011年の年代記の記述では「愚策、悪政」を *unrædas* と記されている。のちにこの不名誉な形容詞 *unræd* が *Æpelred* の名に付されることになる。
11. テキストは *The Anglo-Saxon Minor Poems* (New York: Columbia Univ. Press, 1942) pp. 7—16.
12. *The Battle of Maldon*, 45—61行.
13. 『モルドンの戦い』173—180行.
14. 『年代記』のなかでは簡潔に「この年エアルドルマン（州の長官）のビュルフトノースはモルドンで戦死した」と記されている。
15. モルドンの戦いの年代についてのコメントは次の論文参照
Edward B. Irving, Jr, *Studies in Philology*, Vol. LXI11 (1961), 'The Heroic Style in *The Battle of Maldon*,' p. 457.
16. 『ルパスの説教』74—79行。この時代にはキリスト教徒の亡きからは土葬にされるのが習わしであった。この点からもエドワードの遺体焼却は異常な事態を予測させる事件だった。
17. 『ルパスの説教』43—47行。
18. 『ルパスの説教』93—97行。
19. 『ルパスの説教』104—108行。
20. アルフリッチの出典は *Homilies of Ælfric*, Vol. II (EETS, OUP, 1968), xxi *De Falsis Diis*, ll. 118—25. 参考までに原文を示す。

pas manfullan menn wæron þa mæroston godas
þe þa hæþenan wurðodan, and worhton him to godum;
ac se sunu wæs swaþeah swiðor gewurðod
ponne se fæder wære on heora fulan bigeng(e).
þes Iouis is arwurðust ealra þæra goda
þe þa hæþenan hæfdon on heora gedwylde;
and he hatte þór betwux sumum þeodum,

pone þa Deniscan leoda lufiað swiðost.

21. 例えば頭韻語による対句として、『ルパスの説教』には次のよう語句が見られる。

byrsta and bysmara (損失と屈辱), *mæpe and munde* (名誉と安全),
here and hete (荒廃と悪意), *word and weorc* (言行), cf. *word and dæd*.

22. アルフリッチ, *Catholic Homilies*, II, 15.
23. F. M Stenton, *Anglo-Saxon England* (Oxford, 1950^{Rev.}), p. 454.
24. ホワイトロック, 『ルパスの説教』, 31頁。
25. ホワイトロック, 『ルパスの説教』, 21頁。
26. ソープ, 『古代の法』
Cf. Karl Jost ed. *Die "Institutes of Polity, Civil and Ecclesiastical."*
Swiss Studies in English, 47 (Bern, 1959).
27. Tacitus, *Germania*, tr. by M. Hutton, Rev. R. M. Ogilvie (Harvard Univ. Press: 1980^{Rev.}), Section, 12.
28. Section, 11, p. 147.
29. 賢人会を指す OE 語は *witenagemot* (> meeting of the wise men (= councillors); cf. 民会を表す OE は *folcagemot* (Latin *populi consessus*).
30. ウルフスタンの「代官」については『古代の法』, 『行政組織の提要』, 320頁。
31. 司祭については同上, 『行政組織の提要』 326頁。
32. 聖職者については同上『行政組織の提要』 334頁。
33. 修道僧については同上『行政組織の提要』 322頁。
34. *English Historical Documents I* C 500—1042 ed. by Dorothy Whitelock. (Eyre & Spottiswood, 1955), 31, The laws of Wihtrred, King of Kent (695), p.162. (以後, 『英国歴史文書』).
35. 教会については同上, 『行政組織の提要』 338—40頁。
36. 『年代記D』 959年は詩の形式で記述されている。
37. ファウラー, 『エドガーの教会法』, 序論 xxxi-iv頁。
38. Skeat, *Ælfric's Lives of Saints* Vol. 1 (EETS), 17章 370頁。

39. エドガーの法典 (Edgar's code) については『英国歴史文書』41, IV Edgar, 962—963頁。なお、ホワイトロック, 『英国歴史評論』, lxiii, 1948 'Wulfstan and the Laws of Cnut,' 433-52頁を参照。
40. 『英国歴史文書』41, 398頁。
41. 『英国歴史文書』32, 367頁。
42. 『英国歴史文書』42, 401頁。
43. 『英国歴史文書』42, 401頁。
44. 『英国歴史文書』43, 402頁。
45. 『英国歴史文書』44, 405頁。
46. ステントン, 『アングロ・サクソン イングランド』, 538頁。
47. M. K. Lawson, 『英国歴史評論』No. 424, 1992年, 'Archibishop Wulfstan and the Homiletic Elements in the Laws of Æthelred II and Cnut,' p. 573.
48. H. R. Lyon, *Anglo-Saxon England and the Norman Conquest* (Longman: 1991 2nd) p. 277.
49. 『英国歴史文書』170, 738頁。この文書は修道院改革に関連してビードがヨークの大司教エグベルトにあてた書簡である。
50. ステントン, 『アングロ・サクソン イングランド』, 455頁。